こっそり教えます

青木雨彦

講談社

てり教えます

青木雨彦

講談社

青木雨彦
1932年横浜生まれ。1955年早稲田大学文学部卒業。
新聞記者、編集者生活を経て、現在、インタビュアー、コラムニスト。
著書に「夜間飛行」「課外授業」(日本推理作家協会賞受賞)「洒落た関係」
「優しくなければ……」「冗談の作法」「大人の会話」「つき合い方知ってますか」
「雨彦流当世文章作法」「長女の本」などがある。

こつそり教えます
昭和五十九年十月十二日　第一刷発行

著　者　青木雨彦
発行者　加藤勝久
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二　一二一二／郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五　一一一一(大代表)／振替東京八　三九三〇
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
定　価　八八〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

© Amehiko Aoki 1984, Printed in Japan
ISBN4-06-201556-0(0)　(文1)

目次

I 楽しむ

消しゴム人生……12
ピンピンの千円札……14
書類を外側に折る……16
記念写真の〝保存〟……18
50円玉貯金……20
銀行振り込みについて……22
カンガルー・カレンダー……24
いま何時？　あと何分？……26
ネクタイの選び方……28
古いワイシャツ……30
名刺の利用法……32
靴とハンカチ……34
手先が器用……36
洗濯ばさみと美女……38
安全ピンと紳士……40
お見舞いの花……42
メガネの汚れは？……44
気くばりこそ慶弔……46

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

トゲつき灰皿……48
女流の小説を楽しむ……50
夜のチョウ、夜のガ……52
靴を乾かす……54
その靴を履く前に……56
トイレに並ぶ……58
悠久のにおい……60
トイレにマッチを……62
肌に合わない……64
二刀流ブラッシング……66
歯を磨く……68
老眼鏡でおしゃれを……70
フロの容赦は……72
しまい湯三昧……74
旅館で渡すチップ……76
ホテルの絵ハガキ……78
旅に自前のタオルを……80
旅先からの赤電話……82
旅の名人……84
長旅にスリッパ……86
催促の手紙……88
パーティにて……90

II 味わう

お茶の熱さかげん……94
日本料理の食べ方……96
ブレンドしておいしく……98
ニセモノ(?)のすすめ……100
コーヒー・シュガー……102
コーヒー滓にも……104
ワインの栓……106
ビールの効用……108
熊の掌……110
飲む前に卵の白身を……112
温かい飯に生卵……114
タタミイワシはトースターで……116
カレー味のもやし……118
魚好き……120

ニンニクのにおい……122
塩かげん……124
タレと日中友好……126
モミジおろし……128
カツオブシを削る……130
ワサビ利かせて……132
ソバと七味唐辛子……134
カユについて……136
刺し身のツマ……138
家庭の味・ミソ汁……140
坊主汁とは？……142
夜食にラーメン……144
即席ラーメンにいためネギ……146
開封後……148
モチと冷蔵庫……150
パンと冷凍庫……152

Ⅲ 探す

一杯の水……156
ながら健康法……158
肩こりとマッサージ……160
しびれをとる……162
寝つけないとき……164
恍惚の人を守る……166
町内の地図……168
決まった席にすわらない……170
いい席確保術……172
居眠り迷惑防止法……174
午後5時の翳……176
三列縦隊……178
口紅は消しゴムで消す……180
もう一つの時刻表……182

復唱　あるいは電話に出たら……184
通話中のブーッ……186
礼状は窮余の速達で……188
とっさの白墨……190
メモをとる……192
チラシ活用法……194
書き損じのハガキ……196
祝電を読み上げる……198
すみません……200
緒方式作文術……202
揮毫の〝技法〟……204
牧水三首　酒はしずかに……206
虫退治は割り箸で……208
春待つ心……210
梅雨寒の……212
趣味は草むしり……214
あとがき……216

装幀　岡村元夫
装画・カット　平松尚樹

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

こっそり教えます

I

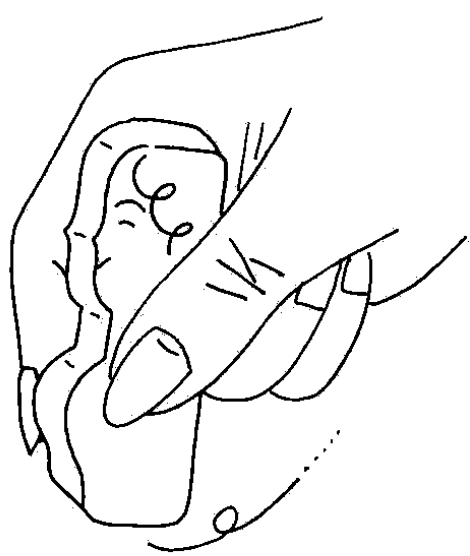
楽しむ

消しゴム人生

「消しゴムのような人生だった」

というのは、どうであろうか？　他人の不始末を少しずつ少しずつ消していくうちに、いつしか我が身も痩せほそっているような人生である。

なんだか、安っぽいテレビドラマみたいになってきたな。いや、恥ず



かしい。

スーパーマーケットなどで買ってきた調味料のビンのフタには、バッチリ値段のシールが貼ってあり、ツメではがそうとしても、なかなかはがれないことがある。半分くらいはげかけて破れてしまうと、ノリのせいだろうが、いつのまにか真ッ黒になっていて、まことに気色が悪い。

あれをはがすのに、消しゴムを使うのである。消しゴムで消せば、いや、こすれば、じつにきれいにはがれてしまう。

そこで、

「消しゴムのような人生だった」

というのは、どう？　彼の人生は、他人に貼られたレッテルをはがすうちに、少しずつ痩せていく人生だった……。

ピンピンの千円札

ホントは、

「ピンピンの一万円札を何枚か財布に入れるとき」

と書き出そうと思ったのだが、いかにもウソっぽくなってしまうので、

やっぱり、

「ピンピンの千円札を何枚か……」

というふうに書き出そうと思う。

たとえば、銀行かなんかで一万円札をくずし、ピンピンの千円札十枚

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com